

「旅のメモ」海外雑詠六十句

朝の茶は草根木皮夏テラス
アイガーに長柄鎌ふる草刈女
地芝居の弓引くテルも牧人か
舞踏会の短夜ありぬ鎧の間
牧童の牛下ろしゆく今朝の霜
露都五月森の白樺なほ萌えず
レーニン像の吾と居残り白夜更く
ナターシャの肩の白さや更衣
ワーニャ老い兔殖やしつ森暮らし
たんぼぼや黄の北限に近づきつ
氷海や船囚はれてゐる港
スナフキンの絵皿求めぬ雪の町
限りなく雪鎮まれり北極圏
低き日や雪原に御す犬五頭
囲炉裏炎え黙す拝火の夜長し
セルビアや弾痕処々に西日壁
渺々のひまわり果つるエーゲ海
エルベ越ゆる電車難民天高し
国境を七つ越えても麦の秋

かぼちゃ肥え移民九代目豊年祭
ライ麦の遙かに刈られ秋の海
ノヴァスコシア楓も犬も秋の風
甲板に人残りゐる今日の月
北回帰線ともに越えたり冬の月
赤道の二月群青潮ながる
南洋の花咲き春のなきに倦む
ぶよまとふ勝者の碑読むニューギニア
戦史館の軍靴小さし驟雨過ぐ
船は見つ入道雲の生き死ぬを
蟹の朱の兜も太刀も筆られぬ
マカオ春華僑の熱き夜の賭場
浮草や水牛沈む昼下り
物売りの魚の匂ひや大団扇
民生くる混沌を見つ鳥雲に
春乾き黄土を山羊の移りゆく
西域や石榴を噛みつ天山路
ラマダンや胡人の宿の餐晩し
海賊に不寝番の立つ夏月夜
ごみ荷負ふ驢馬のカスバの日照坂
明け急ぐリビヤ砂漠は蜜の色

古くよりベドウィン辿る蟻の道
木乃伊のみこそ永遠と砂漠炎ゆ
括られて月の沙漠の駱駝寝る
白ナイル蝗沸き立ち日は昏し
夏星の降る砂丘越え四駆ゆく
コルシカの夏木は貧し石に風
サハラ吹く南風は艇を汚したり
皇帝の配所の月やエルバ島
黄に憑かれ病む絵師ありきアルル秋
アッシジの僧の種採る葉草園
舫ひ船カンナ育ててセーヌ河岸
巴里の秋メトロのリフト古びたり
王の塔地平に秋の声満ちぬ
ポルドーへ閘門四十水の秋
刈り残る葡萄ににじむ日の疲れ
アルザスやワインを舐める秋の蜂
ロンドンデリーの古謡身に入む港町
キリストの言葉短し夜長し
冬の風車梯子に靴の吊られをり
冬潮や濡るるヴェニス石畳